

明治の佐伯三青年 (19)

—— 龍溪・鳴鶴・鶴谷 ——

愛國社再興の動き

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

西南の役における大分県の防備は、香川権令が二月二十四日から三回にわたって、旧藩士族から義勇兵を募った。佐伯旧藩士は百八十人がこの募兵に応じたが、三月六日になって、東京から松垣権少警視が警視庁巡查五百人を率いて来県すると、民心も一応鎮まり、応募兵は県から慰労金二円を支給され、一旦郷里へ引き揚げた。

ところが五月に入って、薩軍の奇兵隊は突如として県南を襲い、二十五日佐伯に侵入した。慌てふためく町民の中で、前に書いた佐藤蔵太郎がこの危急を県庁に急報すると、県からは浅間艦が至急南下し、浅間艦は二十六日には佐伯湾の大入島守後浦から薩軍めがけて艦砲射撃を行った。柴田南華の「豊後西南戦記」によると、六十

三発が発射されたという。

こうして、一旦後退した薩軍は、新たに重岡より増援部隊を得て城下町に進出し、この時は軍艦孟春が撃退したが、同艦が佐伯を離れると、薩軍は再度六日に佐伯を蹂躪する。全くの無防備であった佐伯を占拠した薩軍は西郷拳兵の趣旨を説き、士族には従軍を強制し、商人には軍資金を出すよう勧誘した。この頃、熊本鎮台兵に従って豊後入りを急いでいた犬養は、のちに、七月二十二日、佐伯から送った原稿に、この時の薩軍の勧誘の模様を次のように書いている。

「西郷の理想が実現したら、士族の社会的・経済的地位を旧に復し、平均二十五石の永世禄を与える。ゆえに十七歳以上四十歳以下の男子はすべてわが軍に荷担せよ」と。

こゝに至って、佐伯旧藩士が結成した新奇隊四十人が薩軍に同調するが、このように、政府軍の呼びかけに応じた者百八十人、薩軍に従った者四十人と、各人各様の思惑が入り乱れている。この四十人は、のちに戦死者十一人、政府軍に投降七人、無事帰郷者二十二人となったが、中には「武士の復権」にかけた者もあれば、たゞ西

郷の意気に感じた者もあったであろう。こゝらに、あえて九州の維新を決行せざるを得なかった実状があるように思われてならない。

ところが、隣藩の臼杵では旧藩士が一致団結して薩軍に抵抗し、町を守りぬいた。豊後の小藩では各藩それぞれの状態の仕方が異なっていたが、とにかく臼杵で大敗した薩軍は鏡峠から佐伯になだれこみ、追跡する政府軍も六月十二日に始めて佐伯に進駐した。薩軍は番匠川をさか上りながら、横川から重岡方面に遁走した。

一方、肥後路から豊後入りした熊本鎮台の野津旅団は、竹田・三重方面から進撃し、二十一日に重岡を奪還した。どうやら薩軍の矛先を食いとめた政府軍は、宮崎県の県境まで薩軍を追跡しながら、野村隊の死物狂いの抵抗にあつて、七月に入ってから一進一退の山岳戦となつた。

豊日国境の佐伯前線では、黒沢の「東光庵」に出張参謀部を置いて児玉少佐が指揮をとり、野津旅団長自ら出馬している。

その間犬養は、つねに最前線に従軍し、目撃のまゝを記事にして、読者の好評を得ていた。それだけに、交通

の便が悪く通信がと絶えると、流れ弾に当たった死亡説がとび出したり、「戦地直報」九十二回の末尾には、鋤雲老人（栗本）をして、「犬養子、豪胆不屈、常使人冷然汗下」の評を書かせている。

野津旅団に従つた犬養は、こゝで期せずして矢野や藤田の生まれ故郷である佐伯に入ることになつた。矢野家はすでに東京に移っていたが、藤田の実家である林家は佐伯の町にある。又、両先輩から昔仲間であつた旧藩士の動向について、日頃から案じていたことはよく聞かされていた。当然犬養は、その消息や佐伯の状態について、藤田に手紙を書いたであろうが、現在見聞するものは残されていない。新奇隊の動向について、確証が得られなかつたのかもしれない。薩軍の勧誘の様子を報じたにとどまっている。

大分・宮崎の県境では、一進一退の山岳戦が続いたが、その頃西郷は延岡から北川村熊田に移り、政府軍の出方を待っていた。政府軍はじりじりと薩軍を日向に後退させ、西郷の拠る可愛岳付近の大包圍作戦を展開しつゝあつた。これを知つた西郷は、八月十五日に全軍を解散させ、自ら可愛岳を突破して鹿児島に帰つた。そして、さ

しもの戦乱も、九月二十四日政府軍の総攻撃で城山も陥ち、「わが事終れり」と西郷の自決によって幕を閉じた。

犬養は、西郷の死に直面し、感激して次のように「戦地直報」を結んだ。

「――英雄の末路遂に方向を錯り、屍を原野に曝すと雖も、戊辰の偉功国民誰か之を記せざらんや。嗟我輩は官軍凱旋の日に歌ひ、国家の旧臣が死せるの日に悲しまざる可らず」

犬養は最後の記事を打電して従軍を終えると、神戸まで海路をとり、神戸からは日報社の特派員末松謙澄と同行し、東海道を歩いて帰京した。

西南の役を終結は、国民の期待感を挫折した。その期待が西郷の人望でもあったが、その波紋は大きかった。報知の記者仲間でも様々な意見があった。勿論、通知は四月五日の社説で西郷の拳兵を一応支持したが、帰京した犬養の見聞によれば、新聞社での淡論風発という生やさしいものではなかった。

「会津士族の薩軍に対する恨みは、怨霊の再現のような表現の出来るものではなかった」

「それはそうじゃ。当然のことながら一太刀一太刀に怨念がこもっている」

報知の社説までけしかけた元評論新聞の記者達も、西郷の自決によって憤懣やる方なかった。

「その会津も、太政官の新政府に反撻しながら、薩軍に切り込む士族同志の血闘は、見たものでなければわからぬ」

犬養の見聞は続いた。

「なに。明治政府は会津士族を最前線に出して、会津戦争の宿怨を利用したまでじゃ」

誰もが感じる当然の作戦ではあったが、こうして記者の口から話されると、一瞬座が静まり返った。

「今となつては、何もかも割り切れんのう」

突然、藤田の怒声にも似た大声であった。

「これで九州の維新も終つた。様々な見方もあろうが、これだけの出費は誰が責任をとる」

日が経つにつれて、矢野は別の受け止め方をしていた。

「そんなこと知るもんか」

車座に仲間入りした元洋論社記者の放言であった。血気にはやる過激なこの記者達も、だからといって、

もしも西郷軍が天下をとったとして、今の明治政府に代る新政府が、何をなし得るだろうか、誰にも予測出来る確証はなかった。

それよりも、矢野の心配した西南役征討費の整理について、政府の四苦八苦は現実にはさし迫っていた。のちに征討費総理事務局長官に任せられた大隈重信の双肩には、千五百万円の借金と正貨準備のない新紙幣二千七百万円の処分が残されていた。結局は国民の増税に負担されたことはいうまでもない。

矢野や藤田の師である福沢は、この「西南戦争の利害得失」について、次のように指摘した。

「一時新政を布き、人民の権利を許し、学者の説を容れるだろうが、結局武人だから、事務に降参して小俗吏輩に欺かれるであろう」と。

それでは、政府の専制を黙認しておればよいかという論理にはならない。福沢は、これについても、「丁丑公論」の執筆目的の中で、「抵抗の法は一樣ならず、或は文を以てし、或は武を以てし、又或は金を以てする者あり」と分類し、「以て日本国民抵抗の精神を保存して、

其気脈を絶つことなからしめんと欲するの微意のみ」と、様々な抵抗精神の必要性を強張している。福沢自身は、法に触れるのを避けて、明治三十四年に、この「丁丑公論」を公刊しているが、門下生である矢野や藤田等は、当然「文による抵抗」の指標を福沢から受けついでにちがいない。だが、一家言をもった当時の門下生達が、一様に師の福沢と同じ受けとめ方をしたとは思われない。特に、錐を突きさすような鋭角的な性格の藤田などは、若さも手伝って物足りなさを感じていた。

「戦地直報」で一躍人気を博した犬養は、藤田と約束した通り社の報酬を得て学業に復帰したが、復帰するや否や、師の福沢に、

「命知らずの大馬鹿者」
と一喝された。

福沢は犬養の軍人志望を知っていたらしい。それでも文才を認められて、福沢の談話筆記を命ぜられたり、報知社に月三回の論説を寄稿して、学資の心配もなく英学に邁進した。

矢野は西南役終結後、九月二十九日に「斬刑ヲ廢シテ

絞刑ヲ偏用ス可キヲ論ス」を社説に書き、月一回の割合
いで社説を書きながら、相変らず政治的な行動に終始し
ていた。

矢野は初めから藤田の遊軍の形で入社したが、全責任
を負わされている藤田にとっては、毎日の論説に苦痛を
覚え、矢野の行動が羨ましかった。

そこで藤田は、犬養に社説の回数を増やすよう押しつ
けたが、犬養は納得せず、これが原因で、犬養はしばら
く藤田と袂を分つようになった。

政府にとっては、西南戦争の鎮圧は、不平士族に武力
行使の無意味と、強大な政府の実力を示すのに充分であ
った。そして、独立国の感さえあった鹿児島を組み入れ
ることによって、土族暴動の心配はなくなり、木戸亡き
あとの実権は、自ら大久保の手に移ることになった。あ
れだけの勢力を誇った西郷軍が壊滅しても、政府の実権
がやはり薩摩勢の手中にあるところに、維新後十年の薩
長の歩みがあった。

しかし、自由民権の新勢力は、政府の専制に対して、

じっと手をこまねいていたわけではない。

武に對する同じ文の抵抗でも、活字や言論による波及
もあれば、積極的に足で動いて遊説して廻る方法もあつ
た。当時は、文章の素要となると、四書五経ぐらいの習
得は常識であったが、口で伝える方が早く簡単であった。
この運動が、西南戦争終結後、半歳を経て徐々に高まり
つゝあつた。

顯著な例は土佐の立志社の動きである。

西郷なきあと、在野の眼は当然板垣に集まつた。征韓
論が容れられなかつた時、下野した板垣・副島・後藤等
は建白書を政府に提出し、民選議院設立の必要性を主張
したことは前に書いたが、この時彼等は同志の集まる場
を作るため幸福安全社を興し、愛国公党を組織した。一
方板垣は土佐に立志社を創立し、一つの政治結社を試み
た。これらの政治結社は全国に波及し、西南戦争後再び
動きが活発になってきた。板垣はこの動きを待っていた
かのように、有志を糾合すべく全国に社員を派遣して自
由民権説を遊説させようとした。

板垣は、出来得れば全国の結社をまとめ、愛国公党の
ような愛国社の再興を夢みていた。

だが、愛国社の再興については困難な問題が山積していた。板垣の静止をきかず、西郷軍に呼応せんとした片岡・林等は、現在獄にあり、またこの動きを知った政府は、早くから間諜を放って成行きを見守っていた。これに対して民衆は、この政府の姑息な手段に激怒し、騒然たる有様であった。

この勢をみた板垣始め立志社の幹部は、民衆を説得しながら、遂に愛国社の再興を決議した。

そして、この年の九月に大阪大会を開くべく、遊説員を各地に派遣することにした。

板垣の狙いは、従来の土族意識一辺倒を一步進め、人心をつかんで、四民平等、全民衆的世論を喚起することにあつた。

しかし、その矢先に、四月になって、幹部の大江卓・岡本健三郎が捕縛された。さきに獄に下つた林や片岡等と同罪を問われたのである。

矢野が京都でそれとなく政府筋から探知し、大江に注意した心配が今や現実となつた。

この知らせを聞いた矢野は、寒気のする思いだつた。

そして突嗟に、

「俺も危い」

と思つた。

矢野は、西南戦争が起こるや、沼間等と自衛協会の設立に奔走し、京都では大江等土佐派との往来は頻繁であつた。当然、政府の要注意人物であつたが、若輩と記者という職業が身を助けたのかもしれない。その後何の気配もなかつた。

こんな時、矢野は無性に沼間に会いたくなり、沼間からの連絡を一日千秋の思いで待っていた。

一方政府は、この頃、久しく開かれなかつた第二回地方官会議を開催し、郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則の三新法を審議した。政府は府県会の設置によって、公租徴収の便宜をはかり、その選挙及び被選挙資格を、夫々地租五円・十円として、「恒産ナキ」者をしめ出すことを考えていた。

これは、板垣等が一般民衆と手を結ぶ計画に、一応の歯止めをする形となつた。

こうして、新法は七月二十二日に公布されるが、この

時機に、民権運動の遊説活動をますます困難にする大事件が起った。

五月十四日、政府の実力者であり、参議兼内務郷の大久保利通が、参朝の途申、紀尾井坂清水谷の辺で、島田一郎等石川県の士族六人によって刺された。

報知社は勿論、世の中は一時騒然となったが、この事

件を契機に、政府の民間の志士に対する監視は厳しく、

民衆は遊説隊員に会うことさえ避ける有様であった。

西南戦争後の民権運動は、怒濤の如く全国に押し寄せ、時勢は急速に変化しつゝあったが、今度はその民権運動を唱える矢野が、一転して政府部内に入ることになるから、歴史の推移は皮肉なものである。

表紙解説

木造狛犬

こま いぬ

米水津村立岩神社蔵

製作年代不明 推定江戸時代 高さ約四十 cm 彩色

石造狛犬は佐伯市南郡に多く見られるが、木造狛犬は非常に少ない。希少価値の高いものである。(軸丸氏)

中国では秦・漢の頃より建築物や墳墓の前に獅子形を立てる風習があり、これが朝鮮及び日本にも伝わって来た。日本ではこれを唐獅子とか狛犬とかいう。中国渡来あるいは高麗の犬という意味であろう。左右一組のもの

を総称して獅子または狛犬といい、あるいは左を獅子、右を狛犬と呼ぶこともある。

大化前代に日本に伝来し、守護と装飾を兼ね、はじめは宮殿に置かれ、後に神社の内殿から外陣・門前・鳥居付近にすえられ、また寺院にも用いられるようになった。素材は木・石・鉄・陶などいろいろある。左は閉口、右は開口している。開閉口を阿吽あうんになぞらえ、陰陽をあらわすというのは、仏教の所説によるものである。

左の獅子は身体金色・毛髪緑青、右の狛犬は身体銀色毛髪群青に塗られる。(日本歴史大辞典) 塩月記